

## 富嶽三十六景

巨大な波の彼方に見える富士山。画家ゴッホが弟テオに宛てた手紙の中で激賞し、フランスの作曲家ドビュッシーが仕事場に掲げ、交響曲『海』を作曲したなど、国境を越え芸術家の靈感を刺激した逸話に事欠かない『富嶽三十六景』は、北斎の作品の中でもとりわけ広く親しまれている。1831年（天保2）の出版当時も、大波や桶の向こうに富士山が見える奇抜な構図や、西洋から紹介されて間もない化学染料ベルリン・ブルー（通称「ペロ藍」）をふんだんに用いた色彩が、新しもの好きの江戸っ子を喜ばせた。「三十六景」というものの、実は全部で46図ある。主板（一番重要な線の部分が彫られた板）が藍で摺られているもの36枚が最初に出版され、続いて主板が墨で摺られているものが10枚出版された。それぞれの図がどの順序で制作・出版されたかについては諸説あるが、天保4年頃には完結したとみられている。

### 「山下白雨(さんかはくう)」

冠雪を抱いて白く輝く山頂は、雲ひとつない快晴の空だが、中腹は夏雲におおわれ、一面黒々とした山麓には赤く光る稲妻が見える。おそらく地上では、「山下白雨」と表題にあるように、にわか雨が降っているのだろう。このようにさまざまな気象条件を一画中に盛り込むことで北斎が表現したのは、天候を超越した存在である富士という山の峻厳な姿だった。

### 「凱風快晴(がいふうかいせい)」

富士山は夏から秋にかけての早朝、朝焼けに山肌を赤く染めることがあるという。その一瞬の神秘的な現象をとらえたのが、一般に「赤富士」の名で知られるこの「凱風快晴」である。空一面の翳雲と山容のみという単純な構図だけに、臨場感は一層高まり、画面には霊峰の名にふさわしい気高さがあふれている。

朝日を受けて燃えるような朱に染まり、いま明けようとする大空に凜然とそびえ立つ北斎の富士は、霊峰の名にふさわしい神秘性をたたえている。「赤富士」現象は夏から秋にかけておこるといふ。層雲による横の流動感、鋭角に描かれた山頂の上昇運動、左右にひろがる裾野のどっしりとした安定感。青赤緑の色調による見事な量感。一部のすきもない緊張感がみなぎっている。対象にぎりぎりまで肉薄した造形の極致。北斎の代表作であり浮世絵の最高峰。72歳頃にして、このみずみずしい感受性。描くことに狂気となった画人の成しえた業（わざ）である。

#### ※「初摺り」と「後摺り」

ひとつの版木で摺るうちに、版は磨滅して品質のよい版面ができなくなる。よい状態で摺ることができる最初の200枚ほどを「初摺り」と呼ぶ。初摺りは画工と版元の監視下で行われるため、画工が当初意図した仕上がりに最も近い。これに対して、初摺りが完結した以降に摺られたものを「後摺り」といい、版元の都合や時代の好みに合わせて改変が行われることもあった。「山下白雨」の後摺りに、裾野に松林の描かれているものがあるが、これは北斎の意図に無関係の例だとされている。「凱風快晴」のように、後摺りのほうが赤く、「赤富士」の通称のイメージに近い例もある。

#### 「神奈川冲浪裏(かながわおきなみうら)」

巨大な波は今まさに砕け落ちようとし、その下の小舟は襲いかかる波濤に抗うこともできぬまま、ただ潮流に身をまかせている。北斎はその光景を、まるで同様の舟に乗っているかのような低い視点でとらえた。荒々しくも雄大な大自然の威力を、見事に表現した一図である。印象派のドビュッシーがこの作品に靈感を受け、交響曲「海」を作曲したというエピソードもある。

※ 以上の3作品は三役と称される。

#### 「駿州江尻(すんしゅうえじり)」

東海道第18宿として栄えた江尻は、三保の松原の景勝地でも古くから知られていた地である。その江尻を画題に北斎が描いたのは、強風に悩まされる旅人であった。木々の葉は飛び散り、懐紙が宙に舞うなか、人々は手で笠を抑えて前屈みとなりながらも歩を進めていく。そこから一番に感じ取れるのは、描かれていないはずの強風であろう。北斎はこうした人物や景観のとらえ方によって、見る者に「風」を強く意識させる手法を、絵手本などでたびたび行っている。

#### 「尾州不二見原(びしゅうふじみがはら)」

「桶屋の富士」として呼び親しまれている。中央に丸い作りかけの桶を配し、中で桶作りに励む職人の作業風景を描いている。桶の丸い円の中に、小さな三角の富士の姿が見える。北斎は、同シリーズの中で幾何学的な形態の追究を行っており、こうした対比の面白さを存分に発揮した佳作である。

- 出典 「もっと知りたい葛飾北斎 生涯と作品」 永田生慈 監修 東京美術  
「週刊日本の美をめぐる 視覚の魔術師 北斎」 小学館